

総動員体制下における「モンペ」の普及 思潮・文化としてのファシズムから考える

森 理恵

日本女子大学家政学部

「総動員体制下における『モンペ』の普及」という
題でファシズムをキーワードに考えてみます。2021
年7月29日・30日にデュッセルドルフのハインリッ
ヒ・ハイネ大学で“Gendering Fascism”というワー
クショップが開かれて、発表いたしました。そのこと
を後藤絵美さんにメールでお伝えしたところ、こち
らでも同じ内容で報告してはどうかと勧めていた
きました。

まずはそのワークショップについて簡単に紹介
します(資料1)。ジェンダーとファシズムについて、
様々な地域を取り上げて新しい視点から考えるとい

う趣旨でした。1日目の午前は表象をテーマとする
二つのセクションがあり、最初の報告はスペインに
“Y”というサンディカリズムの女性誌がありますが、
それに関する第二次世界大戦中の話です。二つ目は、
ハンガリーに亡命したアルメニア人の方がナチスド
イツに協力した話、三つ目は『満洲グラフ』の男性表
象についての報告です。

次のセクションの一つ目は日中戦争の親日政権に
おける男性表象の話です。続いて、戦争中の日本の歌
謡曲の女性性の表現と男性性の表現についての報告
です。三つ目の報告者のAndrea Germerさんは主催

Gefördert durch
DFG Deutsche
Forschungsgemeinschaft

hhu Heinrich Heine
Universität
Düsseldorf

Gendering Fascism

Imaginaries, Media, Technologies

Online workshop organised by Andrea Germer and Jasmin Rückert
Heinrich Heine University, Düsseldorf, Germany

In this workshop, we look into gender and fascism as political categories that have not been sufficiently understood in their co-constituting faculties. Both gender and fascism are not separate and isolated phenomena but are deeply intertwined, so much so that one cannot be fully undone without undoing the other. “Gendering fascism” therefore denotes a paradigmatic lens through which we explore the genesis, configurations, strategies and technologies of fascist imaginaries. Relating media in Asia to their contemporary European, Soviet and American models, we invite a discussion on the transcultural trajectories of fascist modernities and their gendered iconographies.

Day 1 / 29 July 2021 / Central European Time

09:00 – 09:15	Introduction
09:15 – 10:45	Representations: Reading, Seeing and Hearing Fascisms 1
09:15 – 09:45	<i>Benito Rial Costas</i> 'Next to Man and in Our Place': 'Y' or the Shaping of the Spanish National-Syndicalist Woman (1938-1945)
09:45 – 10:15	<i>Izabela Mrzygłód</i> 'A Strong Type of Polish Woman': Gender Relations in the Polish National-Radical Movement in the 1930s
10:15 – 10:45	<i>Jasmin Rückert</i> Manchuria Graph - Fascist Aesthetics in Imperial Propaganda?
10:45 – 11:15	Break
11:15 – 12:45	Representations: Reading, Seeing and Hearing Fascisms 2
11:15 – 11:45	<i>Jeremy Taylor</i> Visualizing the Occupied Chinese Man: Axis Aesthetics and Gender in Wartime China
11:45 – 12:15	<i>Stefano Romagnoli</i> Patterns of Femininity and Masculinity in Wartime Japanese Popular Songs
12:15 – 12:45	<i>Andrea Germer</i> Technologies of Gender/ Technologies of Fascism in Wartime Japan
12:45 – 13:30	Break

Gefördert durch
DFG Deutsche
Forschungsgemeinschaft

hhu Heinrich Heine
Universität
Düsseldorf

13:30 – 15:00	Contradictions? Fascisms for/by Women
13:30 – 14:00	<i>Rosa Vasilaki and George Souvlis</i> Contradictory Representations or Organic Aspects of Fascism? An Evaluation of the Metaxas Regime (1936-1941) Through Its Propaganda About the Role of Women
14:00 – 14:30	<i>Asato Ikeda</i> Japanese Fascism and Female Painter Uemura Shoen (1875-1949)
14:30 – 15:00	<i>Andrea Pető</i> Mediated Männerbund: A Story of Collaboration and Compliance in Hungary During WWII

Day 2 / 30 July 2021 / Central European Time

09:00 – 10:30	Intersections: Family, Religion and Fascisms
09:00 – 09:30	<i>Anca Diana Axinia</i> Family Portraits: Gender, Politics, and Personal Relationships in the Romanian Legionary Movement
09:30 – 10:00	<i>Florian Graf</i> Gender and the Spanish Fascisms (1923-1975)
10:00 – 10:30	<i>Jorinde Wels</i> Picturing the Mothers of Warriors: Social Semiotics of Women in Wartime Mobilization in Japan
10:30 – 11:00	Break
11:00 – 12:00	Formations: Fashioning and Imagining Bodies 1
11:00 – 11:30	<i>Rie Mori</i> Monpe: Perfect Women's Attire for the Fascist State
11:30 – 12:00	<i>Irena Haylor</i> The Fascist Spectacle of the Japanese Mannequin Girl
12:00 – 12:45	Break
12:45 – 14:15	Formations: Fashioning and Imagining Bodies 2
12:45 – 13:15	<i>Christopher K. Tong</i> Engendering Chinese Personhood: A Select Bibliography of Proto-Fascism in Early 20th-Century China.
13:15 – 13:45	<i>Carlo Mall</i> Revisiting Male Phantasies - Representations of Gender in Italian and German Interwar Literature
13:45 – 14:15	<i>Sunho Ko</i> The Dreams of Male Gardeners: Urban Gardens on the Korean Homefront (1941-1945)
14:15 – 14:30	Break
14:30 – 15:30	Reflections & Discussion

資料1 ワークショップ“Gendering Fascism”プログラム

者でもあります。この報告は大日本婦人会の機関紙である『日本婦人』の分析だったと思います。

1日目午後のセクションの一つ目は、ギリシャのメタクサス政権のプロパガンダにおける女性の役割についての報告です。次の池田安里さんはフォーダム大学の先生ですが、日本画家の上村松園についての報告です。通常は、戦争画を描いていない日本画家に戦争責任はなかったということになっていますが、上村松園の戦争中の絵を見るとファシスト的な傾向が見られるという内容です。

2日目の最初はルーマニアの話でした。続いてスペインのファシズム、日本の国策紙芝居のなかの母親の表象、次が私のモンペの話でした。その次の報告では日本の「マネキンガール」のパレードを取り上げていらっしました。最後は中国、イタリアやドイツ文学の話でした。

主催者が日本研究者なので東アジアに関連する報告が多かったのですが、それだけではなく東欧、中欧、スペイン、イタリアと幅広い地域についての報告がありました。ファシズムについては様々な解釈があって、それについて論争していたら終わらないようなところもありますが、ここでは「ファシスト的な傾向」ということでいろいろなものを見ていくのではないかと考えておりました。

アジア太平洋戦争中の日本はファシストか？

日本についてこの時期のことを研究する際に、果たして戦争中の日本国家はファシストなのかということがよく議論になります (Harootunian 2021, Tansman 2009, Harootunian 2001, Griffin 1995, McCormack 1982等)。英語圏での論争を日本語で読むことができるものとしては、ケネス・ルオフさんの『紀元二千六百年——消費と観光のナショナリズム』(2010)の序章や、池田安里さんの英語の本を日本語に訳された『ファシズムの日本美術』(2020)の最初のほうにも論争の経緯が紹介されています。

Roger Griffinの*Fascism* (1995)は様々な地域のファシズムに関する文献を集めたものです。そのなかで日本は少し違っているとされています。1936年に枢軸国に参加したけれども保守層に支配されているとか、天皇の権威を基礎としているとか、そういう点はファシズムとは少し違うということが述べられていました。

これに対して、日本文学研究者であるAllan Tansman

の*The Culture of Japanese Fascism*は様々な人の論文が入った2009年の本で、この人自身が単著で*The Aesthetics of Japanese Fascism*を出されていますが、この人に言わせれば、文化という面から見ればヨーロッパのファシズムに当てはまるのが日本にも当てはまるということです。具体的に言うと、近代の脅威に対するリアクションであるとか、「反貴族主義、反保守主義、反資本主義、反共産主義、『神話的核』や血と精神にもとづく民族の団結による階級の分裂の回避」というものがファシズムの定義だとすると、それは日本にも当然当てはまると言っています。カリスマ指導者がいないとか、下からの革命ではないので、日本の政権はファシスト政権ではないとよく言われますが、いま言った面から見ると、ファシズムという枠の中で考えられるのではないかということです。

日本語圏では丸山真男の『日本ファシズムの思想と運動』(1948)があって、「天皇制ファシズム」という言葉が使われて、日本のファシズムとヨーロッパのファシズムの違いが論じられています。他にも吉見義明さんの『草の根のファシズム』(1987)や、Allan Tansmanよりだいぶ前に日本語では赤澤史郎・北河謙三編の『文化とファシズム』(1993)という本が出されています。2021年には大塚英志『「暮し」のファシズム』が出版されました。ただしこれは研究書というよりは評論やエッセイに近いと思います。

日本では、1940、1950、1960年代ぐらいまでは、まだファシズムについて論じられていたと思いますが、1980年代以降の日本のファシズムという名前がついている本を見る限りは——詳しい政治学の論文を見れば違うと思いますが、今回の発表に近いような文化に関わるファシズム関連の文献を集めてみると、ファシズムの定義を行っていません。タイトルに「ファシズム」とつけているのに、本のどこを見てもファシズムの定義がないというのは、自明のものとしてファシズムの定義はあまり行わないというのが、文化史に関わる日本語圏の人の傾向なのかと思いました。

今日は、ファシズムから見たら日本のモンペはどうかということで話しますので、日本の政権をファシスト政権だったという立場で話します。ただし、自分で言っておいてなんですが、私個人の考え方としては、Takashi Fujitaniさんが*Race for Empire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans*

During World War II (2011) で書かれたように、日本は枢軸国だったからイタリアやドイツと似ていたというよりは、アメリカの帝国主義と共通性があると見ています。Fujitaniさんはこの本のなかで、日本の帝国主義とアメリカの帝国主義に共通点が多いと述べられていて、私自身はそちらの考え方のほうがいいと思っています。

モンペの発明—— 婦人標準服

農作業着の近代化

まず、尾崎(井内)智子さんの「農村生活改善による改良野良着の普及とモンペ」に書かれているように、1920年代から農作業着の近代化が行われます。日本列島も長いので地域によっていろいろですが、農作業着としてかつては、ズボン状の衣服を穿かず、短い丈の着物のようなものを着て、エプロン的なものを着けて、脚絆を巻く。腰にも巻きつけて、足にも巻きつけていますが、ズボン状のものは穿かない形でした。もちろん寒い地域などではズボン式のものもあるにはありましたが、1920年代以降、ズボン式のを普及しようという運動が盛んになって、西日本や暖かい地域にも普及させようという運動が行われます。

“Gendering Fascism”のワークショップで取り上げられていた紙芝居「戦士の母」(日本教育画劇、1941年)



資料2 植民地台湾の女学生

『大東亜戦争と台湾青年』朝日新聞社、1944年12月25日、21ページ

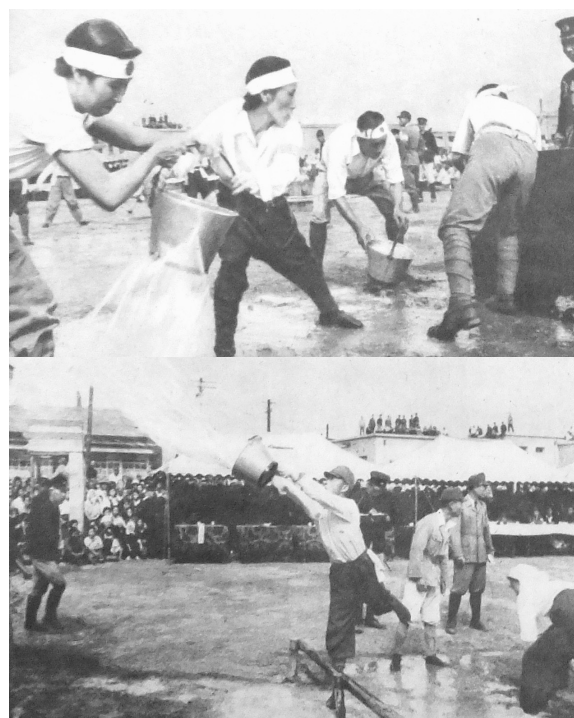
の絵を見てなるほどと思いましたが、1941年の紙芝居のなかでも、おばあさんが着ている農村の格好はまだモンペではありません。短い着物に腰巻と脚絆です。当時、農村にモンペが普及していなかったことをこれが表しているというのはあまりにも乱暴かもしれませんが、そういった側面もあるかと思います。

モンペの「発明」

古い時代にズボン式のものがあるにはありましたが、「たっつけ」や「パッチ」と呼ばれるものをもとに、いま知られているモンペの形のものが工夫されていったのだろうと考えられます。

それが戦争とどう関わるかということですが、1920年代から農村生活改善運動のなかで農作業着の近代化が行われて、現在よく知られるモンペのような形のものが工夫されます。それが1930年代後半になると軍人の目に留まり、防空演習などで使おうということになりました。軍人は1930年代後半ぐらいいから言っていますが、これを女性が非常時に着るといいということで実際に防空服として普及するのは、太平洋戦争も後半になってからだと思います。資料2は台湾の例です。台湾の女学生たちが勤労奉仕、1944年の戦争中の農作業着としてモンペを着ている様子の写真です。

資料3は台北の防空演習の様子です。大日本帝国



資料3 植民地台湾の防空演習

『大東亜戦争と台湾青年』朝日新聞社、1944年12月25日、23ページ

新しき美

私の隣には通明高等女學校がありつて、土曜日の午後には、女生徒たちが師操がかり姿で甲斐々々しく近所の往來の通脚をして

くねる、夏の暑い日、汗ばんだ脚を赤く火照らして馬車馬のひりつばした風を断も残さぬやうに通脚に始末をしてゐる。昨年あたりから、防空訓練がしなれしことではない、家庭婦人たうて帽子を掛けて、図様に上

んでも、お通さんでも、モンペを穿く位は心持たもので、今年いや昨年どの女學校の運動會にはバケツで水を運ぶことや、土曜に前に駈せて走ること、風筒をぶつたり熨斗で收容したりする

文繪 闘争がプロ
香山光郎 グラムに加
香塚大 へられてあ
山與大 つた、奥く
光志氏 も、第八十
郎氏 一團會開院

島半動躍

「今年朝鮮半島大ナリ宜シク開光一心を以て國力増強シ敵國ノ非國ヲ駆逐スヘシ」

と仰せられた、體力増強のためには、女性の新装進出が急務と認められることであらう。玉の肌、軍の肌は益々分るれぬことにならう、腸壁の皮膚、畑の埃や工場のおで雨れたモンペと断くれ立つた手！これが今後日本女性の新しい美とならばならない、これがまた強きもの、母となるよすがともなる。|| 藤野野矢(香山光郎)は著述家、日本文藝新會會員、大塚氏は元朝鮮京城女學校教員、* (原無署名)

資料4 香山光郎「新しき美」朝日新聞朝鮮版1943年1月1日号

大村益夫・布袋敏博編(2002)『近代朝鮮文学日本語作品集 1939~1945: 評論隨筆篇3』緑蔭書房、244ページ

内の様々なところで行われていますが、防空演習のときにモンペを穿くとよいというか、むしろ穿きなさいと推奨されて、太平洋戦争後半に普及していくことになります。

1942年に厚生省から婦人標準服というものが発表されます。発表されるまでにアイデアを募集したり、様々な方が議論されたりしていましたが、1942年2月に発表されました。甲型、乙型、活動衣があり、甲型は洋服式だけれど少し着物の要素を取り入れたもの、乙型は着物式ですが、たもとを短くしたり活動的にしてみたもの、活動衣は防空演習や勤労奉仕に使うものです。甲型、乙型、活動衣にも何種類ありますが、大きく分けるとこの3種類です。活動衣の下衣として使われているのがモンペです。

大日本帝国のモンペ

植民地台湾での例をいくつかお見せしましたが、資料4は植民地朝鮮の例です。李光洙という近代朝鮮文学の父ともされる方が、香山光郎という日本名で新聞に書いた短いエッセイです。この絵を描いた

のは日本の画家ですが、セーラー服にモンペ姿で勤労奉仕を行っていて、その姿が美しい、新しき美だというエッセイが書かれたりもしております。

朝鮮半島のモンペの普及については韓国の研究者も研究されていて、韓国語の論文もあります。日本では井上和枝さんが論文を書かれています(井上2011)。そもそも朝鮮には農村振興運動というものがあり、そのなかで女性の生活の変化があり、さらには戦争中、強制的にモンペを穿きなさいということがありました。韓服ですとスカート状のチマの下に穿くソツパジがありますが、それとモンペの形がよく似ていて下着で歩いているように見えるということで最初は抵抗がありましたが、農村振興運動から戦争中の強制的な動員の過程で抵抗感が薄れていきモンペが普及していくということが、井上さんの論文で述べられています。

次はジャワの例を見ていきます。『ジャワ・バル』という朝日新聞系のジャワ新聞社が、軍政下のインドネシアのジャワで出版していたグラフ誌です。防空服についての記事の中に「mompe」と書かれています。日本の標準服の活動衣と同じですが、下がモン

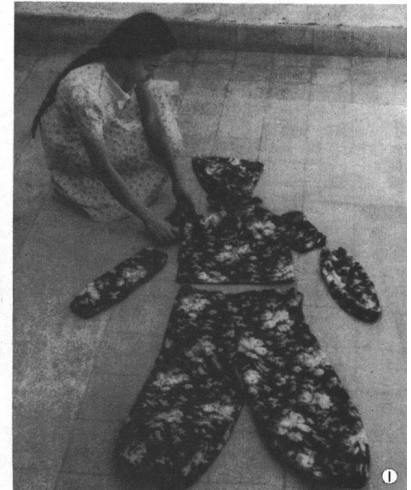


PENDAPATAN BAROE

Pakaian oentoeok Penjagaan Bahaja Oedara

„Serangan oedara!“
 Pada ketika serangan oedara tiba tidaklah perloe lagi bersalin pakaian, akan tetapi pakaian jang telah lekat dibadan dengan begitoe sadja bisa teroes dipergoenakan boeat bertindak dalam penjagaan bahaja oedara. Pakaian jang demikian telah diboeat oleh Sekolah Roemah Tangga „Sakura“ di Soerabaja. Oentoeok memboeat pakaian itoe tjoekeoplal asal sadja ada 3½ m. kain lama jang kemoedian dapat oentoeok memboeat kuedoeng, saroeang lengan, dan mompe bagian bawah jang bisa disingsingkan. Oentoeok bagian jang lain pakaian sehari-hari begitoe sadja bisa dipergoenakan.

- Gambar 1: Pakaian baroe oentoeok bertindak dalam penjagaan bahaja oedara.
- Gambar 2: Pergi kesekolah dengan pakaian biasa.
- Gambar 3: Seketika tanda bahaja oedara dimakloemkan, laloe menangkalkan rok dan tjelana mompe jang ada tersingsing dibateuh rok tadi diteroenkan sampai kemata kaki.
- Gambar 4: Saroeang lengan jang telah disediakan dalam kantong, laloe disambongkan.
- Gambar 5: Kuedoeng dilekapkan kekepala, maka lengkaplal pakaian penjagaan bahaja oedara.



資料5 『ジャワ・バル』1944年7月15日号

倉沢愛子編・解説(1992)『ジャワ・バル 復刻版』龍溪書舎



資料6 モンペ普及の経緯とファシズム

ペになっています。「ジャワの伝統的な衣服であるサロン1枚からこれだけ作れますよ」という作り方も載っています。

モンペとファシズム

モンペとファシズムとがどう関係があるのかについてお話しします(資料6)。まず、勤労奉仕や防空演習のときにモンペを一斉に着せようということで、女性を動員する装置としてのモンペという側面があ

ろうかと思っています。

また、たとえばヨーロッパの場合ですと、戦争中に活動に便利だということで、女性がズボンを穿いて男性みたいな格好をすることに対する抵抗のようなものがありました。それに対してモンペの場合は、もともと近代的なモンペは女性のために開発されたものなので、男装だということにはなりません。これを穿いているから男みたいな格好だということにはならないので、女性らしさは保持される。しかしながら、先ほど「階級の分断を調停するものとしてのファ

シズム」という話をしましたが、モンペは農村由来で上流階級の出自ではないですけれども、戦争中には上流階級の人にも「モンペを穿きなさい。セレモニーでもモンペを穿きなさい」ということで、あまねく行き渡り、階級に関係なく着られる服としてモンペがあったと言えるかと思います。

モンペは農山村由来だと考えられていて、それをもとに近代に工夫されたものだと思います。農山村の文化に対する注目が1930~1940年代にかけて盛り上がります。ご存じのように民俗学や民芸運動や、それこそ総動員体制期、ファシズム期と言ってもいい時期の地方文化運動のなかで、「都会の貴族的な文化ではなく、農民の文化にこそ本当の日本があるのだ」とする民族主義が盛り上がります。そういうものとモンペの美意識が一致した面があると思います。

また、1920~1930年代はファッションの隆盛期で、和服も洋服も両方ですが、百貨店などを中心に都会の目まぐるしく移り変わる時期、ファッションが盛り上がった時期、それがいろいろな形で地方にも伝播していった時期だと思います。そうした華やかな目まぐるしいファッションの隆盛に対する反発もあって、ファシズムの特徴の一つとして「資本主義のなかの反資本主義」と言われたりもしますが、すべての人がそうだとは言いませんけれども、ある面では流行を追いかけるのに疲れたような人がモンペの美しさに惹かれたという面もあったのではないかと考えています。さかのぼれば、モンペスタイルは古いものでもなんでもなく、日本の伝統的なものでもないですが、そう思わせる何か、「ここにこそ日本の民衆の本当の美がある」と思わせる何かがあったというなかで、モンペが普及していったのではないかと考えられます。

標準服の甲型、乙型はほとんど普及しませんでした。モンペだけが普及していきます。甲型、乙型はそれほどおしゃれな感じがしないということもありますが、いろいろあるファッションの一種に見えたと思います。しかし、モンペスタイルはそういうものとは違う、資本主義や階級の分裂を超える何かを見出して、積極的にモンペに飛びついていった人々がいたのではないかと考えています。だからこそモンペは太平洋戦争の後半期にすごく普及したのではないかと考えています。

おわりに

以上に述べましたように、モンペの特徴として、①女性性の保持、②労働着であること、③農山村由来であることが挙げられます。モンペの普及の経緯とファシズムの主張には関係があると考えていますが、ワークショップ“Gendering Fascism”で発表したときに、「それはファシズムというよりもNativismだよ」とか「Socialismとは関係がないのか」などの意見がありました。ファシズムということだけではなく、様々な面から考える必要があると思います。

モンペは、いま日本で思われているほど昔から普及していたものではなく、戦争中の1930年代後半から1940年代初めの写真やフィルムを見ても、それほど入っていません。太平洋戦争末期に、防空演習や実際の空爆が盛んになるにつれて、バツと広まったのかと思います。農作業着として実際に普及するのは戦後です。韓国でも、気軽な日常着としてモンペがいま普及していますが、実際に生活のなかに実用的なものとして広まっていったのは、むしろ戦後ではないかと考えています。

参考・参考文献

- 赤澤史郎・北河謙三編(1993)『文化とファシズム——戦時日本における文化の光芒』日本経済評論社
- Brandt, Kim (2009) *The Beauty of Labor: Imagining Factory Girls in Japan's New Order*. Allan Tansman, ed. *The Culture of Japanese Fascism*. Durham and London: Duke University Press.
- Brink, Dean (2012) *Pygmalion Colonialism: How to Become a Japanese Woman in Late Occupied Taiwan*. *Sungkyunkwan Journal of East Asian Studies* 12 (1): 41-63.
- Craik, Jennifer (2005) *Uniforms Exposed: From Conformity to Transgression*. Oxford: Berg.
- Fujitani, Takashi (2011) *Race for Empire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans During World War II*. Berkeley: University of California Press.
- Gordon, Andrew (2005) *Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Griffin, Roger, ed. (1995) *Fascism*. Oxford: Oxford University Press.
- Harootyan, Harry (2001) *Overcome by Modernity:*

History, Culture, and Community in Interwar Japan.
Princeton: Princeton University Press.

- Harootunian, Harry (2019) *Uneven Moments: Reflections on Japan's Modern History*. New York: Columbia University Press.
- Howell, Geraldine (2012) *Wartime Fashion from Haute Couture to Homemade, 1939-1945*. London and New York: Berg.
- 池田安里 (2020) タウンソン真智子・池田安里訳『ファシズムの日本美術——大観、靱彦、松園、嗣治』青土社
- 井上和枝 (2011)「農村振興運動——戦時体制期における朝鮮女性の屋外労働と生活の変化」『国際文化学部論集』11(2-4): 81-104
- 井上雅人 (2001)『洋服と日本人——国民服というモード』廣済堂出版
- 香山光郎 (2002)「新しき美」大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集1939~1945: 評論随筆篇3』緑蔭書房、244
- 倉沢愛子編・解説 (1992)『ジャワ・バル 復刻版』龍溪書舎
- 丸山真男 (1948)「日本ファシズムの思想と運動」東京大学東洋文化研究所編『尊攘思想と絶対主義』白晝書院
- McCormack, Gavan (1982) Nineteen-Thirties Japan: Fascism?. *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 14(2): 20-32.
- 大塚英志 (2021)『「暮し」のファシズム——戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩書房
- 尾崎 (井内) 智子 (2016)「農村生活改善による改良野良着の普及とモンペ」『東京大学日本史学研究室紀要』20: 35-61
- Ruoff, Kenneth J. (2010) *Imperial Japan at Its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary*. Ithaca and London: Cornell University Press. (ケネス・ルオフ、木村剛久訳『紀元二千六百年——消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版)
- Tansman, Allan. ed. (2009) *The Culture of Japanese Fascism*. Durham and London: Duke University Press.
- 吉見義明 (1987)『草の根のファシズム——日本民衆の戦争体験』東京大学出版会

■ 質疑応答

帯谷知可(司会) 森さん、ありがとうございました。文化としてのファシズムというのはとても興味深い切り口で、様々な形で議論することが可能なのではないかと思いました。実は私の母が、おぼろげな記憶ですが、家の中で様々なことをするのにモンペが着心地がよくて便利だと、よく言っていました。そんなことも思い出しましたが、モンペに関する認識がかなり覆ったようなご報告だったと思います。

事実関係に関する質問として、私から一点、モンペという言葉の由来は何でしょうか。

森 あまり得意な分野ではないのですが、もともと東北地方に「モンペイ」や「モンペ」という言葉があって、新しく作られた言葉ではなく、東北地方にあった言葉が戦争中にあのような形になったと言われています。

戦後になるとみんなアメリカ・ファッションに行くわけですが、そのようななかで左翼系の女性が「モンペの実用性を忘れちゃだめだ。浮かれたファッションをしていないで、モンペを穿いて労働しろ」というようなことを新聞に書くという現象もあって、ファシズムだけでは切れない様々な面があると思います。